

歴史の知識社会学

— ノルベルト・エリアスによる展開 —

犬飼裕一

序論

1. エリアスの背景：実在論の魔女狩りと唯名論
2. 歴史の知識社会学
3. 問題の連続性

序論

ノルベルト・エリアスの独創的な業績についての評価は、近年世界的に高まりつつあり、また日本においても大半の著作が翻訳され、多くの読者をもっている。ところがこれまで社会学理論や歴史社会学、知識社会学といった関連領域との間で、集中的な検討を経てきたとは言いがたい。知識社会学の領域ではその始祖であり、エリアスの師の一人でもあったカール・マンハイムとの関連から検討することも可能であろう。しかし後述するように、エリアスとマンハイムの間には大きな相違がある¹⁾。エリアスを理解するための理論的枠組はいまだに出来上がっていないのである。その原因はエリアスの仕事が膨大な歴史学的知識と、独特の理論的基盤によって成り立っていることにある。1965年の著作のタイトルがいみじくも物語っているように、彼は「アウトサイダー」²⁾として思索し、研究活動を行ってきた。上記の理由をさらに分析していくならば、一方では後述する歴史的な素材に対する社

社会学や社会学理論の領域での関心の低下が密接に関係している。そしてもう一方では、社会科学における歴史主義の衰退以降に、新たに歴史的な素材を扱おうとする彼の試みが、当然のことながら非歴史的な社会考察の主要方向から外れてしまったことによる。さらにエリアスの仕事は、古典的な社会学者たちとの密接な人的つながりにもかかわらず、これまでその方向からの検討すら行われなかった。例えば先に挙げたマンハイムとの関連は例外としても、ゲオルク・ルカーチやゲオルク・ジンメル、そしてウェーバー兄弟について膨大に蓄積されてきた研究は、エリアスとの関連だけではなく、エリアスの存在自体すら無視してきたに等しい。それはなぜなのだろうか。エリアスの仕事の意義を問う場合には、常にこの疑問を念頭に置いておかなければならない。ここから社会学の創始期より今日に至るまでの理論や問題の継続、あるいは断絶が見えてくるからである。上記の古典的著者たちからエリアスへの流れは事実上途切れており、それは近年ようやく再評価され始めたにすぎない。

筆者は他所で、エリアスの歴史社会学の全体にわたる理論的道具立てや、彼が行った歴史的社會研究の含意を論じてきた³⁾。それらで検討したのは、エリアスの議論が従来の社会学理論、社会学方法論からどのような手法を受け取り、それをどのような対象について使用し、その使用によってどのような認識が新たに可能になったのか、ということであった。とりわけそこで中心的な考察対象となったのは、マックス・ウェーバーの社会科学、文化科学方法論における貢献を、エリアスがどのように修正し、加工し、どのように使用しているのかという問題であった。そこで間接的に明らかになったのは、歴史学派の内在的批判として、立ち現れてきたウェーバーの議論が、エリアスにおいて更なる批判に曝されているという事実であった⁴⁾。理想型論を下敷きとした比較類型論による価値自由な歴史分析というウェーバーの方法論は、当の歴史的素材において試されなければならない。そしてエリアスの歴史社会学は理想型的に設定された数多くの類型によって出来上がった比

較類型論としての性格をもっている。その上、エリアスがあらゆる研究において一貫して追究するのは、「社会学」の学としての確実性である。それを彼は理想型的なモデルの設定とその検証可能性に求めようとする。この点からも彼の歴史的対象についての社会学、つまり歴史社会学が、どのような性格をもっているのかは理解できよう。それは従来の意味での世界史の目的論的な発展物語を目指すものでもなければ、今日の文明社会に警鐘を鳴らす時代診断を意図しているわけでもない。エリアスの議論はむしろ過去の社会をより緻密な手段で分析していくことに向けられる。彼の意図に独特の実証主義的な色合いを見出すことは、彼のすべての著作において可能である。この点が、ほぼ同時代を生き、親しい交流関係にあったマンハイムやルカーチの近代の時代診断学的⁵⁾、あるいは弁証法的アプローチからエリアスを大きく隔てている。エリアスは近代社会の内在的で全体的な把握よりも、過去の社会についての個々のモデルを使った分析を通じて、われわれの生きる近代社会の特殊性を実証的に逆照射することを選ぶのである。

本稿の意図は、それらの議論を受け、エリアスの仕事の中に歴史社会学のさらに突っ込んだ理論的可能性を探求していくことにある。第1章ではまず考察の下準備として、20世紀初頭以来の社会理論の動向を、エリアスの方法論の観点から再把握する。20世紀初頭は、エリアスが「社会学第一世代」⁶⁾と呼ぶ著者たちが活躍した時期であり、それぞれの著者たちは、歴史学や経済学、法学、哲学、芸術学などの領域の学識を、まず手中にし、「社会学」という名の考察方法に向かっていった。その後「社会学」が社会の単なる一考察方法ではなくて、自立した学科として独立していく過程は、「社会学第一世代」の人々それぞれの出身領域との間に、次第に人的、内容的、時間的な境界線を設けていく過程でもあった。とりわけ時間的な境界線は重要であり、20世紀科学としての「社会学」は、後述するような19世紀的な諸科学から決定的に切り離されることを期待された。この分離を順次決定したのは、少なくともヨーロッパにおいては二つの世界大戦であった。第2章

で考察するのは、エリアスの仕事が、独自の概念と理論と観点によって、実質的にどのような「社会学」となりえているのかということである。その際、説明のために使用する（導入する）概念は、本稿の表題に掲げた「歴史の知識社会学」である。ここではエリアスが「古典的な知識社会学」と呼ぶものとは異なった彼の知識社会学が、どのような道具立てによって何を明らかにするものであるのかを検討する。これに続く最後第3章での考察は、本稿で理解された「歴史の知識社会」としてのエリアスの業績が、その独自性ととともに、先行者との間でどのような連続性を持っているのか、そして彼が先行者とは異なった社会学を形成することで、どのような進展をもたらしたのかを問題にする。

1. エリアスの背景：

実在論の魔女狩りと唯名論

20世紀初頭以来の社会学的分析の手法が経てきた過程をたどっていくと興味深い現象に出会うことになる。それは初期の19世紀社会学が使っていたような実体的な有機体概念や、倫理的な価値を背負わされた同じく実体的な目的論的概念が、信頼を失い、次第に非実体論的な概念に取って代わられていった現象である。これは社会認識の唯名論化過程として理解するものである。この文脈で実体ではない説明概念としての「社会」や、あるいは「システム」が提唱され、実体として理解されうるのはただ個人のみであると考えられることになる。さらに、極端な場合には「個人」や「人格」を追放し、分析概念としての「システム」だけを極限まで追究しようとする立場も見られる。他方で概念の非実体化への情熱は、上記の自称唯名論的「社会」論やあるいは「システム」論が、実は「社会」や「システム」概念を、ひそかに実体化していることを暴き出し、このような裏口から入ってきた実体論や実在論をあたかも魔女狩りのように探し求めるようになる。このよう

な執拗なまでの非実体化、唯名論化への取り組みの過程で、人々はある程度まとまった形で、非実体化、唯名論化の手法（マニュアル、作法）をいくつか手に入れている。それらは特定の社会思想の伝統が培ってきた諸概念を下敷きとした「関係」で、あらゆる事象を把握しようとする。そこには「コミュニケーション」を中軸に据えた理論構成があり、「意味」や「記号（象徴、シンボル）」や「言語」を媒介とした個人行為や相互行為研究があり、「情報」概念によって機能主義的な社会システムを再構成しようとする立場がある。これらはどれも実体として容認しうる存在者——もちろん極端な場合はそれを一切認めない場合もある⁷⁾——に出発するのではなくて、存在者が（あるいは存在者が除外されている場合は、分析概念としての「システム」内部で）やりとりしているなんらかの非実体的概念によって理論を構成しようとするのである。われわれが検討する知識社会学の動向も、このような理論的背景が刻印されている。

ノルベルト・エリアスの議論は、上記のような概念の非実体化、唯名論化という傾向に深く関係している。ただし他方で彼が扱おうとするのは歴史的過程、あるいは長期的な変動である。このような対象を選択することは、一見、唯名論の伸張と実在論の破棄という今日の傾向に反しているように思われる。実際、「歴史」は、今日の社会理論において鬼子のような位置にある。そのように扱われている対象に、何とかして再び向かうには、上記のような社会理論の傾向に対して、「歴史」という対象を扱うことにより、更なる貢献を行うなり、あるいは説得力ある形での批判を行わなければならない。そしてここで重要になってくるのが、エリアスが歴史的過程や長期的な変動を扱うに際して、上記の問題にどのように答えているのかということである。

そもそも歴史的な素材を認識対象とする歴史社会学研究は、いくつかの側面で通常の社会学的研究とは異なった方法的準備を必要とする。それらのなかで最も重要なのは、歴史学と歴史的な素材が今日の社会には観察されないか、あるいは観察されたとしても人々の関心から遠ざけられているという事

実に深く関係している。当然そこには現代の社会を論じるのとは異なった手続きが必要であり、とりわけわれわれが共有している——とされる——諸了解事項とは別の諸了解事項を共有する過去の人々を扱うための特別のモデルが必要になってくる。エリアスの歴史社会学が、1930年代前半から一貫して追究してきた問題は、いかにして過去の社会が検証可能なモデルによって把握できるのかということであり、そこで生まれたモデルが今日の社会理解に対してどのような貢献をなすうるのかということである。

エリアスがこれについて打ち出したのが、彼の「Figuration」理論である⁸⁾。彼はこれに基づいて「宮廷社会」や「文明化の過程」といった歴史的素材の社会学的分析を行っている。「Figuration」理論は、理論的にはヨーロッパ哲学の長い伝統に基づく社会像の二つの伝統の代替案として構想されている。ここでいう伝統とは何者にも依存しない独立した（社会から切り離された）実体としての「個人」観であり、もう一つは「個人」から切り離され「個人」と対立する実体としての「社会」観である。そして「個人」がそれだけで独立して実在できるものである以上、本来ならば個人が集まって成立しているはずの「社会」もまた「個人」とは別の性格をもつと考えられてきた。そこでは「個人」と「社会」は別のカテゴリーとして別個の分析対象となる。「個人」と「社会」を架橋する手だては、「個人」に依拠する方法論的個人主義と「社会」に依拠する方法論的全体主義の対立のために放置されることになる。エリアスの架橋案は「諸個人の社会」⁹⁾が、相互に関係し依存し合う個人によって形成される「Figuration」としての社会像である。ここでは個人と社会は不可分であり、個人なくして社会はなく、同様に個人は社会なくして少なくとも社会学の対象としての個人ではありえないのである。エリアスはこの「Figuration」理論を下敷きにして、「宮廷社会」¹⁰⁾や「文明化の過程」、あるいは「エスタブリッシュメントとアウトサイダー」の新たな理想型的モデルを作成するのである。個々に作成されたモデルは類型論として再構成され、互いに比較対照される。これは個々の人物の生活史や大事

件、作品や文章化された制度だけを扱う従来の歴史学的宮廷社会論や、国家や社会の大まかな特徴に哲学的・理論的な説明事項をつけ加えるタイプの伝統的な歴史哲学や普遍史論とは、根本から異なっている。彼が目指すのは個人と社会の対立図式に代わる社会像を下敷きとした独自の類型論的歴史社会学なのである。

エリアスの議論が「社会」と「個人」という二つの実体化された概念に対する批判として構想されていることは重要である。そしてさらに重要なことは、唯名論的、あるいは社会名目論的議論が暗黙の前提としてきた実体としての「個人」に対しても、彼が批判的であるという事実である。彼は個人の存在を理論構成の中で否定しようとはしないのだが、個人がそれだけで自己完結した実在として扱われることを、「形而上学」であるとして拒否しようとする¹¹⁾。他方で、このような批判の上に、エリアスが新たに打ち出す「Figuration」理論は、先に触れた非実体化の方策、すなわち非実体概念によるなんらかの形のやりとりによる理論構成の一種と考えることができる。つまり「Figuration」理論は、前記の「関係」「コミュニケーション」「意味」「記号（象徴、シンボル）」「情報」といった概念によるやりとりの一種として理解することができる。別の言い方をすれば、「Figuration」とは理想的な類型として次々と構成されていくことで実体的な概念構成の欠点を補っていくものであると言うこともできよう。重要なのは、概念構成の精度によって分析の精度がどのようにでも変化しうることによって注意を喚起することである。「国家」や「社会」「権力」のように、何もかも同一視してしまうような包括概念から、「国王の起床の儀礼における各廷臣の役割」あるいは「ルイ十四世」といった個別的な事象や個人に至るまで、概念はさまざまな次元で構成され類型として比較対照される。概念構成に対して注意を喚起することは、エリアスの場合、実体的な包括概念によってあらゆる事象を不当に単純化する欠点と、個々の細かな事象にあまりにも集中しすぎて理論的枠組による説明を従前のまま放置してしまう欠点の両方に向けられている。

織物の網目構造のイメージに発する「Figuration」という用語法は、個々の人間が無数につながりあった関係性の中におかれていることに注意を喚起する。遠くから見た織物がなめらかに一体となった全体であるかのように見えるのと同じく、「社会」はさまざまな次元を含んだ巨大な「Figuration」として記述される。織物を遠くから眺めるのか、それとも顕微鏡を使って編み合わせ (Figuration / Verflechtung) を子細に観察するのかは、要するに観点の問題なのである。このような方策は、そこに登場する個々の人間がどのような手だて (メディア, 媒体) によって「Figuration」を構成しているにせよ、ともかく関係概念としての「Figuration」に注目している限りは実体化を逃れているように思われる。

2. 歴史の知識社会学

エリアスが非実体化の手だてとして使用している「Figuration」という考え方は、それでは差し当たってどのようなやりとりをめぐる関係構造を下敷きとするのだろうか。エリアスは『宮廷社会』『文明化の過程』といった主要著作の中で、さまざまな分析枠組を使用している。そこには「体面」「威信」「社交」「敏感さ」「規範」「価値基準」「宮廷的合理性」「有職市民的合理性 (berufsbürgerliche Rationalität)」「礼儀作法」「古典主義」「名誉」「宮廷的人間観察術」「啓蒙主義」「自然主義」「ロマン主義」「信仰」「文化」「風俗」といった分析枠組群が登場し、それらは「Figuration」としての「宮廷社会」や「文明化」を読み解くための手段として使用されている。エリアスが使用する上記の分析枠組に共通する性格は、それらがどれも、実在する (実体的な) 事象を分析するための概念ではなくて、非実体的な「知識」について構成された概念だということである。ここにわれわれが先に述べた社会学の分析手法の唯名論化と知識社会学の展開の相互関係を見て取ることができる。エリアスは「価値基準」や「宮廷的合理性」「有職市民的合理性」といった

概念を、『宮廷社会』の中で最も主要な分析枠組として使用している。このような分析において中心的な位置を占めるのは、非実体的な「知識」（あるいは「感情」）が「Figuration」をどのように形成し（あるいは影響を与え）、反対に「Figuration」が「知識」をどのように形成していくのか、つまり「知識」と「Figuration」の間の相互関係である。彼は一つの知識社会学をこれらの研究で展開しているのである。

エリアスの知識社会学とは、社会的事象と知識や感情の間にどのような相互作用が見られるのかを追究する社会学のことである。彼のいう「知識」とは、宗教や倫理、理念や理想、価値基準、学問、イデオロギーといった概念で把握されてきた諸問題を総括する概念として理解されなければならない。「知識」という概念を使う理由は、上記の諸概念が古くからの概念史的な蓄積のために（くだけた言い方をすれば、要するに手垢が付きすぎているために）、社会学的研究の対象を把握するのに不適切だからである。とりわけ「宗教」や「倫理」「イデオロギー」といった概念は、それらが社会的事象との間でどのような相互関係にあるのかということを考える際、社会における倫理的な判断や宗教的な信念、あるいは政治的なイデオロギー批判との間に緊張関係を引き起こす危険性があるからである。

また、この点がヨーロッパの伝統的な哲学に由来する「知識」と「感情」の分離に架橋を施しているという点で、エリアスの知識社会学をマンハイムのそれと決定的に隔てている。マンハイムは学的な認識を根拠づける「知識」の諸条件に考察を集中した。これに対してエリアスは「感情」の問題を導入することで知識社会学の研究対象をさらに拡大したのである。このため伝統的な用語法でエリアスの仕事を「知識社会学」と呼ぶことには、確かに困難がある。ただし、エリアスの意図にはこのような伝統的な区分を乗り越えていくことがすでに含まれている。問題なのはこの乗り越えなのである。つまりエリアスは彼の知識社会学によって精神と身体の区別、それに基づく知識と感情の区別を解消しようとするのである。この解消によって可能に

なったのは、従来の知識社会学が取り扱ってこなかった諸問題を議論の対象とすることである。とりわけ「感情」に属するとされてきた諸問題が社会学の扱いうるものとなったのである。例えばスポーツにおける非日常的な感情をめぐるエリアスの議論は彼独自のものであるし、「アウトサイダー」をめぐる分析でも部外者に対する感情的な反応を知識社会的な分析に組み込んでいる¹²⁾。そしてエリアスの議論は取り残されてきた諸領域にまで手を広げることで、これまでになく独自の貢献を可能にしているのである。

エリアスが代表作の一つである『宮廷社会』で展開した議論は、宮廷社会に生活する貴族が「合理性」として信奉していた価値基準が、今日のわれわれが信奉する「有職市民的合理性」と異なっていたという事実に出発する。エリアスのいう「宮廷的合理性」は、「体面」「威信」「社交」「礼儀作法」「古典主義」「名誉」「宮廷の人間観察術」といった概念で把握される一連の事象と密接に結びつけられ、知識（と感情）が「宮廷社会」との間でどのような相互関係にあるのかを問うのである。宮廷的合理性は、あらゆる事象を経済的な基準や、経済に密接に結びつけられた「職業」観念によって考えようとするわれわれの「有職市民的合理性」とは、根底から異なっている。いわゆる「絶対主義王制」期のフランスの宮廷社会に生活する宮廷貴族は、本質的に「職業」を持たない人々であり、彼ら自身、積極的な経済活動を展開することが賤しい身分の行為であると考えると同時に、時にはそれらを法的に禁止されてすらい人々なのである。彼らはわれわれが信奉する経済的功利性、労働の意義、尊厳、専門家意識やそれともなう倫理観といった知識ではなくて、上記の「体面」や「威信」、「名誉」といった知識によって、より多くのやりとりを行っていると感じていた。

これは確かに、われわれの社会とは異なった形の知識のやりとりを行うことによって成立している社会である。また反対にこのような社会に生活する人々は、われわれとは異なった知識（と感情）を生み出していくのである。そしてエリアスはフランスのアンシャン・レジーム期の軍事的問題や経済問

題、政治・権力問題を、以上の知識との相互関係の中で再検討するのである。エリアスは軍事史や経済史、政治史がこれまでそれぞれ独立して自己完結的に論じてきた諸問題を、知識との関連から再把握しようとするのである。これは歴史的社会の知識社会学、とりわけ宮廷社会の知識社会学である。歴史の知識社会学は、歴史的対象としての「宮廷」を、われわれの時代とは異なった知識の作動様式によって分析していく。その際、先に論じてきたエリアスの「Figuration」理論が分析において再び大きな役割を果たす。つまり個人によって形成された「Figuration」としての社会の中で、個人を相互に結びつけているものは、まさにここでいう「知識」なのである。軍事史や経済史、政治史がそれぞれ別個に、個人とは切り離された軍事的社会や、経済的社会、政治的社会を独自の説明図式によって、またある程度の実体化をともなって論じてきたのとは異なり、エリアスはそれらを人間間の知識のやりとりとして把握しようとする。これによって過去の社会は、そこに作用していた今日とは別の「知識」の相互作用を明らかにされることで、新たな姿をとって現れてくるのである。「歴史の知識社会学」という表題を掲げた本稿の主眼がここにある。

ただし上記のようなエリアスの知識社会学的研究は、徹頭徹尾、唯名論的前提に終始しているわけではない。実際のところ、ここまで論じてきたエリアスの打ち出した方策や議論が、完全に実在論的思考を逃れているとは言い切れない。例えば、件の「Figuration」概念が実体的な性格を与えられていることを、すべてにわたって否定することはできない。「Figuration」概念が、実際の事象の説明や理解において、従来の実体的な性格を持った「社会」概念の単なる言い替えてでないということを保証するには、エリアスの提示している理論的な探求は、まだまだ不足しているということが出来る。それに彼は「Figuration」概念によって実在している「社会」という対象を、さらに精密に把握しようと考えてさえいる。この場合、実在する「社会」が実在するという意味は、自然科学の対象としての太陽系や分子や原子や、エ

リアスが青年時代に学んだ解剖学¹³⁾の対象としての脳や骨格、内臓、神経、筋肉組織が、実在していると考えられているのと同様である。ここにエリアスの自然主義的（実証主義的）実在論の契機を読み取ることは容易である。

3. 問題の連続性

本稿ではエリアスの歴史社会学を、表題に掲げたとおり「歴史の知識社会学」として理解しようとしてきた。このように理解することによって、エリアスの仕事は今日まで長年にわたって続けられてきた社会理論や、社会学方法論の展開に、比較的適切に位置づけることが可能になるのではなかろうか。ただし非実体化、唯名論化のパラダイムとの関連という観点からだけ見てきたことによってエリアスの重要な側面を無視する間違いを犯してはならない。ここで重要な側面というのは、歴史社会学の古くからの課題にエリアスがどのような貢献を行っているのか問うことである。新奇な概念（用語）を次々と提示していくことで非実体化、唯名論化を推し進めていく——エリアスはこの点で非常に地味な人物である——のとは別に、実質的にそれらによって何が認識できるようになったのかが、まず問われなければならない。つまり従来の歴史社会学では見落とされていたか、あるいは認識不可能であった対象がいかに取り出されているのかが問題なのである。

エリアスの問題は歴史社会学の古くからのテーマに直結するものである。本稿では「有職市民的合理性」や「有職市民」の価値基準と過去の社会の合理性や価値基準が異なっていることを強調してきた。そして前述の拙稿で論じてきたように、エリアスの『文明化の過程』の主要テーマは、われわれの合理性や価値基準がどのようにして歴史的に成立したのかということにあった。これは言い換えるならば、「近代資本主義の精神」の成立を問うものである。本稿で展開してきた議論に近づけていうならば、マックス・ウェーバー¹⁴⁾がこの問題に取り組んだとき、主な検討対象としたのは、「プロテス

「タンティズムの倫理」という知識と、「資本主義の精神」という知識の間の相互関係であった。ウェーバーはここから経済的な問題を最優先の課題とする価値観の成立を考えようとしたのである。ウェーバーがその普遍史的問題設定の中枢に掲げた近代的人間類型の成立は、同時に近代的な経済倫理がいかにして成立したのかという関心を喚起する。ウェーバーとの関連でしばしば論じられてきた近代的な経済倫理は、実体的に把握された「経済」とは異なった知識としての「倫理」であった。ウェーバーはここでいう「知識」を分析の中心に据えることで古典経済学からマルクス、歴史学派国民経済学にまで継承されてきた経済史の伝統と手を切ること成功している。これをウェーバーが「経済史」とは呼ばないで、「世界宗教の経済倫理」と命名していることは決して意味のないことではない。それは同時に宗教や宗教学とは異なった「宗教社会学」の成立でもあった。ここに経済学とも宗教学とも倫理学とも異なった「社会学」という新事業の20世紀初頭における存在意義が確認される。ただしウェーバーの議論を子細に検討することは本稿の課題をはるかに乗り越えているので、この問題についてこれ以上検討することは別の機会に譲ることとしたい。

エリアスはウェーバーに比してはるかに多くの分析枠組を設定し、多面的な形で「宮廷社会」や「文明化の過程」を叙述しようとする。ウェーバーが対比（比較）による関係分析に仕事を限定したのに対し、歴史の知識社会学としてエリアスはさらに知識相互の関係性だけでなく、知識の歴史の変動過程の叙述を目指す。ここで「Figuration」理論のもつ叙述への適応性が問題になる。エリアスは理想型として構成された「Figuration」に基づいて、過去の社会の価値基準を相互依存性として叙述し、それを通して現代の価値基準の相互依存性をも示そうとするのである。この結果エリアスの仕事は、時系列上の定点として観測される知識間の相互関係の分析を越えて、歴史の変動過程の叙述となったのである。

その際にエリアスの歴史叙述を可能にしたものが「Figuration」理論で

あった。ウェーバーは神経質なまでの態度で、概念の非実体化や実体概念につきまとう価値判断の介在の明示に取り組んだが、結果として伝統的な歴史哲学や普遍史論が扱ってきた問題を放棄することになった。放棄されたのは、まさに「過程」や「生成」の問題であり、目的論的な契機を含んだ歴史の「方向づけ」に関する諸問題である¹⁵⁾。エリアスはこれらを再度問題にするのである。ただしそれは従来の歴史哲学や普遍史論とは異なった形によってである。エリアスの考えた歴史の知識社会学は、ウェーバーの経済倫理に関する歴史社会学を「過程」や「生成」の問題に拡大したものであるとすることができる。ウェーバーの研究が、知識としての「資本主義の精神」と「プロテスタンティズムの倫理」との、いうならば定点間の関係に考察を限定したのに対し、エリアスはさまざまな類型として把握される長期にわたる「文明化の過程」を問題にしようとする。このように考えていくと、エリアスの議論は、歴史社会学がウェーバー以来取り組んできた「近代資本主義」をめぐる問題に、新たな形で取り組んでいることが分かる。その場合にエリアスが用いている方法は、長期間にわたって生成と消滅を繰り返していったさまざまな「文明化過程」の、さまざまの次元における「Figuration」を次々と記述していくという方法であった。ウェーバーの理想型的類型論¹⁶⁾はいくつもの時間軸にそって拡張されたわけである。これによってエリアスは「歴史」や「歴史過程」という古いけれども長年にわたって鬼子扱いにされてきた対象を、社会学において再度把握しようとするのである。

〔注〕

- 1) 文献表 Elias 1990a, 1984 参照。エリアスはマンハイム以来の知識社会学の流れを「古典的な知識社会学」と呼び、自分の研究とはつきり区別している。彼によれば「古典的な知識社会学は、科学以前の観念すなわちイデオロギーと社会構造の連関を示す試みだけに自己限定している」(Elias 1970, S.39, 訳 36-7 頁)。
- 2) Norbert Elias / John L. Scotson, *The Established and Outsiders: A Sociological Inquiry into Community Problems*, London 1965. この本は後に Michael Schröter によって関連論文をつけ加えられ、ドイツで翻訳刊行された, Elias 1990c.

- 3) 犬飼 1995b, 1995c 参照。本稿はこれらと互いに補い合うものである。
- 4) ただしこれらの論考ではこのことについて暗示するに止めた。
- 5) エリアスは社会とそこにおかれている人間の状況の全体的な診断ではなくて、「社会的現実」の「特定の断面の解明」を精緻化していこうとする。Cf. Elias 1983, S.428-9, 訳 446-7 頁参照。
- 6) Elias 1990b, S.107-8.
- 7) この場合の非実体化、唯名論化への情熱は驚くべきものであり、認識手段としての理論構成を越えて認識目的としての理論を連想させるものである。ここに社会理論に対する哲学の過度の影響を見ることは可能であろう。
- 8) この問題については犬飼 1995b, 1995c において集中的に論じているのでそちらも参照されたい。
- 9) 1939 年に書かれ、1987 年まで未刊行であったエリアスの論文のタイトル、文献表参照 (Elias 1987)。ここでの概要は同論文を下敷きにしている。
- 10) 「宮廷社会」の問題は上記の犬飼 1995c で重点的に論じた。
- 11) 例えば彼は『宮廷社会』で次のように書いている。「本書においては、すでに見たように、社会学的個別研究を通じて明らかにされた理論的基本構造を、その妥当性に関し、経験的研究自体の枠内において再検証することが試みられた。それ故、本書は社会学において今日なお支配的な名目論的理論 (nominalistische Theorien) とは一線を画している。この名目論的理論の代表者たちは人間社会の研究を唱えながらも、結局のところ、単に個々の孤立した個人だけを現実的 [実在的]、根元的に存在しているものとして (als real und eigentlich existierend) 問題にする。その結果かれらが社会について述べる一切は、畢竟個別的な個人から抽象された特性にすぎず、同時にまた、時としては、個々の個人から独立した体系ないしは形而上学的存在に他ならない」(Elias 1983, S.313-4, 訳 236-7 頁)。つまりわれわれが論じてきたような唯名論的社会理論の陥ってきた二側面の実在論が問題になるのである。
- 12) Cf. Elias / Dunning 1986, Elias 1990c.
- 13) Cf. Elias 1990b, S.113.
- 14) 「合理性」の歴史的多様性の問題は、マックス・ウェーバーの主要テーマでもあった。ウェーバーは合理性類型論によって歴史の対象の広大な広がりを読み解いていくことを意図したが、「合理性」の分析に類型論という手段を選択することは、同時に、「合理性」をめぐる従来の近代論を根底から問い直すことでもあった。
- 15) この問題は犬飼 1994a, 1995a で集中的に論じたのでそちらを参照されたい。
- 16) 理想型的な概念構成に基づくウェーバーの類型論は、歴史学の方法として捉え直すとき、従来の目的論を下敷きにした通時論的な歴史叙述との間で重大な緊張関係

を生じさせていることが分かる。通事論的な「生成」や「過程」を単線的に論じてきた伝統的歴史学とは異なり、ウェーバーは類型論として異なった時代間の比較に力点を移したのである。これを歴史学と歴史社会学の分岐点として理解することもできるが、同時に歴史学における大変革の出発点として捉えることもできる。詳しくは犬飼 1996b を参照。

〔ノルベルト・エリアスの著作〕

- Elias, Norbert, 1970: *Was ist Soziologie*, München (徳安彰訳『社会学とは何か』法政大学出版局, 1994年).
- , 1976: *Über den Prozeß der Zivilisation* Bd. 1 u. 2, Frankfurt a.M. (赤井慧爾, 波田節夫他訳『文明化の過程 1, 2』法政大学出版局, 1977, 78年).
- , 1983: *Die höfliche Gesellschaft*, Frankfurt a.M. (波田節夫他訳『宮廷社会』法政大学出版局, 1981年).
- , 1984: *Über die Zeit: Arbeiten zur Wissenssoziologie II*, Frankfurt a.M.
- Elias, Norbert and Eric Dunning, 1986: *Quest for Excitement*, Oxford (大平章訳『スポーツと文明化』法政大学出版局, 1995年).
- Elias, Norbert, 1987: *Die Gesellschaft der Individuen*, Frankfurt a.M.
- , 1990a: *Engagement und Distanzierung: Arbeiten zur Wissenssoziologie I*, Frankfurt a.M. (2. Aufl.) (波田節夫他訳『参加と距離化』法政大学出版局, 1991年).
- , 1990b: *Über sich selbst*, Frankfurt a.M.
- , 1990c: *Etablierte und Außenseiter*, Frankfurt a.M.
- , 1991: *Mozart — Zur Soziologie eines Genies*, Frankfurt a.M. (青木隆嘉訳, 『モーツァルト ある天才の社会学』法政大学出版局, 1991年).

〔関連文献〕

- Baumgart, Ralf, 1991: *Norbert Elias zur Einführung*, Hamburg.
- Bogner, Artur, 1989: *Zivilisation und Rationalisierung*, Opladen.
- Featherstone, Mike, ed. 1987: Special Issue, Norbert Elias and Figurational Sociology, in: *Theory Culture & Society*, Vol. 4.
- Gleichmann, Peter / Johann Gouldsholm / Hermann Korte (Hg.), 1979: *Materialien zu Norbert Elias' Zivilisationstheorie*, Frankfurt a.M.
- , 1984: *Macht und Zivilisation: Materialien zu Norbert Elias' Zivilisationstheorie 2.*, Frankfurt a.M.
- 犬飼裕一, 1994a: 「マックス・ウェーバーにおける普遍史概念」, 日本社会学史学会編

- 『社会学史研究』16号。
- , 1994b: 「マックス・ウェーバーの批判対象」, 『理想』654号。
- , 1995a: 「マックス・ウェーバーによる普遍史論の転換」, 日本西洋史学会編『西洋史学』176号。
- , 1995b: 「ノルベルト・エリアスと歴史社会学の方法」, 関東社会学会編『年報社会学論集』8号。
- , 1995c: 「ルイ十四世と宮廷社会の社会学——ノルベルト・エリアスの社会像と差異の問題」, 現代社会理論研究会編『現代社会理論研究』5号。
- , 1996a: 「思想史研究の方法について——賢者の美德から新しい知識社会学へ」, 早稲田大学文学研究科編『文学研究科紀要』第41輯, 第4分冊。
- , 1996b: 「マックス・ウェーバーの歴史学方法論」, 比較法史学会編『Historia Juris 比較法史研究』5号。
- , 日本社会学史学会平成8年度大会発表原稿, 「市民社会と宮廷社会——マックス・ウェーバーとノルベルト・エリアス」。
- Bartels, Hans-Peter (Hg.), 1995: *Menschen in Figurationen*, Opladen.
- Korte, Hermann, 1997: *Über Norbert Elias*, Opladen.
- , 1990: *Gesellschaftliche Prozesse und individuelle Praxis*, Frankfurt a.M.
- Kuzmics, Helmut / Ingo Mörth (Hg.), 1991: *Der unendliche Prozeß der Zivilisation*, Frankfurt a.M.
- Mennell, Stephen, 1989: *Norbert Elias*, London.

(本稿は第68回日本社会学会大会(1995年9月)における報告原稿に加筆修正をほどこしたものである。なお本稿は文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。)